

茶の湯文化学会会報 No.67

第67号/2010年12月20日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

第三十一回 研究会訪中団報告

松本康隆

九月十八日から二十一日、茶の湯文化学会第三十一回研究会訪中団が実施された。その目的は近年田螺山遺跡から出土した世界最古の茶樹（の可能性があるもの）、越窯の中心産地上林湖遺跡、明代茶人徐渭の故居、煎茶七類の碑文などの見学、そして、紹興茶文化研究会との研究交流であった。その中で、僕には個人的な計画が一つあった。現在、日本の茶室と中国の園林（Ⅱ庭園）建築の歴史的接続を試みているが、まだ全くと言っていいほど中国人研究者の知り合いはいない。そこで紹興茶文化研究会との交流会において研究発表を行い、中国人研究者と今後に向けて協力関係を築きたかったのだ。

さて出発当日、成田・関空からそれぞれ日本を出て上海で合流。僕にとって本学会の海外研究会への参加は初めてであったが、これまでずっと本学会の海外研究会をサポートしておられる旅行社の遠藤祐司さんと機中隣になったことを幸いに情報収集。近年までは中国が主な渡航先であったが、最近では東南アジアや韓国への回数も増えているとのことであった。ちなみに、遠藤さんは学生時代に文化人類学を専攻し、日本各地の農村などでフィールドワークをした経験があり、旅

行社ではずっと中国を担当されていたという。研究に理解があり、中国との関わりが深い人のようだ。今回中国での現地手配を下さった鄭竹筠氏は浙江省人民政府対外友好協会副秘書長という要職に就いてらっしゃるが、遠藤さんとは古い仲で杭州と福井の姉妹都市提携に関して共に仕事をしたのははまりであったという。

上海の浦東空港に到着すると、鄭氏、関平先生がお出迎え下さり、喫茶店にて早速中国茶を飲みながら成田組を待つ。その間は個々に自己紹介。谷会長、影山副会長を除いて殆ど初対面の人がばかりであったが、皆さん茶の湯実践者の方々に、中には研究を始められた方、中国との関わり深い方などもおられた。

高橋先生、中村修也先生を中心とした成田組が到着し、バスへ乗り込む。車内では早速鄭氏の歓迎のご挨拶と自己紹介、そして関先生のご挨拶であった。先生からは月餅のプレゼントがあり、その後長いバス中での空腹を各々のタイミングで満たすこととなった。

上海万博の会場を高速道路から横目で見、浙江省に入り世界最長の杭州湾海上大橋を渡ると最初の目的地、余姚である。すっかり暗くなってたどり着いた新皇潮

酒店でアヒルの舌や地元野菜やビールなどを堪能した。ホテルは円高の恩恵を受けて余姚唯一の五つ星ホテル太平洋大酒店、ウェルカムフルーツが夜食となった。

さて、冒頭の僕の計画のためには三日目に控えた研究発表を成功させなければいけないが、恐れ多くもその通訳をして下さるのが関先生である。高橋先生を通じて前もって関先生に原稿をお送りしていたが、部屋にうかがうとプレゼン画像も含めて直接説明を聞いて下さった上、不安な点や今後の研究についても相談のつて下さった。関先生は日本で学位を取得後、国立民族学博物館等でも研究員をされ、現在は浙江樹人大学で副教授をされている。僕は通訳者にこの上なく恵まれたと言つていいだろう。冒頭で述べた僕の計画はこの時既に半分達成されていたのかも知れない。逆に言えば、この時僕は、僕自身の発表の内容をよりがんばらなければならない、と気を引き締めた。

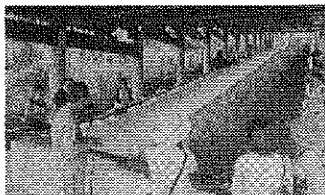
二日目、六千年前の「茶樹栽培遺跡」目ざしている田螺山遺跡へ出発。観光地化されておらず、バスの運転手さんにとつても初めての地であるため、時折現地の人に道を尋ねながら悪路を進む。それをバス中から、生の中

は瓦を載せた鉄筋コンクリートの吹放ち覆い屋で保護されていた。その規模、傾斜具合、焚き口の位置、一部整然と並ぶ台など当時の様子を彷彿とさせる。続いて上林湖越窯遺址文物保管所で出土品を見学。唐から南宋までの各時代継続的な青磁の産地であったこと、生産道具とともに、その技術的な変遷を出土品で手軽に体感することが出来た。当日の見学先を全て消化した後は一路上虞へ。再び中国の開発状況を車中から眺める。都市化の過程として、山の麓に土砂収集と煉瓦製造を兼ねた工場が建てられ、都市の建設材料を供給、その工場の周りには人が集まり商工業が発達、土砂がなくなっても既に他の商工業が原動力となり一つの小都市を造っていく。このようにして山がなくなり、平地に拡がり始めた小都市が互いに連結し、フラットな大都市が生まれていくのかと、勝手な仮説を立てていた。

翌日、宿泊した上虞国際大酒店で朝食後、近くの上虞博物館へ。地域の歴史や文物の展示を見学。特に煎茶七類の碑の見学はメインの一つであった。そして紹興へ。蘭亭、沈園、徐渭の故居を見学後、いよいよ紹興茶文化研究会との研究交流会である。紹興市政協商

会の現状と共に冷静に眺めることができるのは、このような研究会の醍醐味と言えよう。

個人調査では余裕がなく、ツアー旅行では退屈なことが多いからだ。田螺山遺址現場館では孫国平所長による遺跡解説を豊富な映像とともに拝聴した後、隣接する発掘現場を見学した。現場は埋め戻さずそのままの状態で、吹放ちのドーム下に保存されていた。出土した場所はどうかやら環濠集落の内部であるらしい。「茶樹」の位置を確かめた後、出土品が収められている施設へ移動し、「茶樹」現物を写真に収めた。



上林湖遺跡の窓



河姆渡遺跡にて集合写真

その後、この地域一帯の稲作文化・木造建築文化を代表する河姆渡遺跡へ。バスを降りて歩道横の小川を進むアヒルの群と共に歩いた先はレストランで、彼らとは卓上で再会することとなった。食後は満足顔で集合写真の

典のために懇親会からの出席であるため、副会長の金克用氏、副会長・秘書長の呉阿森氏、理事の何信恩氏が迎えて下さった。金氏から歓迎の言葉が述べられ、紹興茶文化研究会の紹介があった。同研究会は政府から膨大な研究費を得て茶文化・産業に関する調査研究を行い、政府へ茶産業の振興に関する政策提言などを行う組織であるという。このような茶文化研究会は各地にあり、全国的なネットワークで繋がっているという。紹興市郷土文化研究会常務副会長でもある何氏から浙江省の茶文化や茶産業、更に、日本に留学して茶の生産に関する研究を行い、中国茶産業の近代化に多大な貢献をした呉覚農という人物についての研究発表があった。続いて谷会長から感謝の言葉があり、日本の茶文化の概説、また何氏の発表を受けた覚農の日本での活躍に関する紹介があった。そして、関先生が隣の席を移し、僕は心強い味方を得たところで発表を開始した。

何先生の興味深い発表、谷会長の茶文化概説を受けて、僕は即興でその感想を入れたのだが、関先生はさらりと臨機応変に訳して下さる。おかげで翻訳の苦勞に気を遣わず、自分の話す内容に集中できるようになった。発

後、野外展示へ。田螺山のドーム内と同様、木柱が突き刺さったような状態であったが、こちらは出土時の復原らしい。そして、傍らには七千年前の建物も復原されていた。復原も色々である。そして、屋内の河姆渡遺址博物館で、展示ケース越しにオリジナルの出土文物を見学した。

その後、越窯の中心地であった上林湖遺跡を見る前に現代の青磁生産を上林湖越窯陶瓷研究所へ。同所長が工場内を一つ一つ丁寧に案内下さった。四角い敷地に逆円型に建物配され、反時計回りに十から青磁製品となっていく、手作業中心ながら合理的な小規模工場であったが、その反時計回りコースから半分独立した中心部では、昔ながらの手練りがなされていた。所長直売価格で購入後、上林湖遺跡へ。上林湖はダム建設によって出来た湖のようであるが、ダム当時そこに住まう人々の生活文化の破壊があったかどうかはわからなかった。一方で遺跡としては良好に保存されているのかも知れない。現在の詩的な風景と船という移動手段は、皆の心を躍らせた。またこの風景、現在を生きる中国の人々に結婚写真撮影をひっきりなしに行わせていた。さて、山の斜面に築かれた九世紀の窯跡

表の要点は以下の三点。①茶文化と同様、建築文化も中日の歴史的な関係が深いこと、②中国の宋時代の茶文化の影響を受けて日本の茶室（抹茶室）が、明・清時代の茶文化と園林建築の影響を受けて日本の煎茶室や数寄屋建築が、それぞれ生み出されたこと、③近代以降の抹茶室は煎茶室の文化を含んでおり、日本の煎・抹茶室と園林建築は歴史的に繋がるといったことであった。そして、伝えたいメッセージは、このように歴史的関係が深く、私的・趣味的な交流空間と同様の特質を持つ園林建築と茶室建築は親和性が高いこと、そしてこれらを今後一体的に捉えることにより、日中友好を象徴する魅力的な空間と成り得る、ということであった。当日使用した急眺えの概念図を今見ると赤面してしまうが、これまで排他的ナショナルリズムで閉じてきた両国の伝統建築を中日で共有できる空間として捉えることは、今後の中国人と日本人の新たな関係を構築することに繋がるのではないかと、と真剣に考えている。しかし、上記三点の仮説にはまだまだ問題点が多い。そのためにもお力添えを頂ければと、最後にお願ひしないわけにはいかなかった。

発表会の後、ホテルの懇親会場では両組織

の会長の挨拶とともに、和やかな食事が始まった。光菜にも同じテーブルに同席させて頂いたが、沈雲姑会長は各テーブルを回り、一人一人と乾杯される、もてなしを大切にされる方であった。今回の訪中で最も美味しく洗練された食事、そしてさすが本場、紹興酒の乾杯の数の多さに圧倒された。

食後はホテルを出て、石橋を越え、水面に電飾が映える茶館へ。中国茶を堪能しながら関先生、遠藤さん、そして初めてゆつくりと喋るもう一人の添乗員の八島虹子さん、更に茶館オーナー王聖蕾氏を交えて5人で歓談した。茶館の設計はオーナー自ら行ったという。伝統的な技術を持つ大工さんも居るらしいが、全部施工してもらうにはやはり高いため、一般の大工と分担して仕事をお願いしたとのことであった。最後の夜はまだ続く。谷会長・影山副会長の部屋で反省会、劳いの言葉を頂いた。

今回の訪中では、谷会長に当初予定になかった研究発表をお許し頂いた。そして、高橋先生は訪中前から研究発表の企画を整えて下さった。しかも東京学芸大の研究室におしよけるようにうかがった際に、高橋先生は嫌な顔ひとつせずお聞き下さり、内容のチェックをした。

詳細な寸法を測定した後、特徴的な蓮華紋であるとして、鎌倉時代末期もしくは室町時代初期を下るものではないとしている。桐山秀徳氏は、「日本における茶臼の研究」(古代学研究所研究紀要 第六輯、一九九六年)で、室生寺の茶臼を輝緑岩製の唐磨(臼)としている。

ここで室生寺の茶臼に関する記載を年代順に整理すると、以下のようになる。最初に報告した川勝氏(一九五三年)は、少し前に倉の中で見つかったとして、長い間倉の中に眠っていたと考えられる。その後、大西・三輪両氏が多くの茶臼を調査した一連の流れの中で、室生寺の茶臼についても調べた(一九七四、一九七八年ころ)。「図録茶道史」では、この当たりの調査結果に基づいて日本最古の茶臼として紹介したのであろう。実際に調査した大西・三輪両氏は、引用として年代推定を記載しているのとどめている。また、少し間隔を空けて調査した桐山氏の論文(一九九六年)では、大西・三輪両氏の報告を参考に、茶臼の摺り面についても考察している。

桐山氏は、摺り面の形態を「周縁平滑型」としている。「周縁平滑型」は、三輪氏が「ものと人間の文化史二五 臼」で規定した茶臼

て下さった上、今後の助言まで頂いた。更に、中国語の翻訳は先生の研究室所属の学生にして頂いた。関先生の協力を得ることが出来たのも、高橋先生のお陰である。訪中の間は残念ながらゆつくりとお話させて頂く機会は無かったのだが、感謝の気持ちをバネにしてがんばっていききたい。

以上、今回の訪中団にて、予想をはるかに上回る収穫を得ることができ、また、学会内でたくさんの方々の魅力な方々と知り合うことができました。様々な場面でお相手して下さいました。皆様、ありがとうございます。また、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。



室生寺の茶臼

沢村信一

室生寺は奈良県宇陀市にある真言宗室生寺派大本山の寺院であり、古来女人高野として知られている。また、室生寺の茶臼は、茶の湯の世界では良く知られた存在であり、多数の成書や論文に取り上げられている。この茶臼は、上臼の直径:18.8cm、高さ:15.5cm、下臼は直径:36.5cm高さ:10.4

の分類であり、現代使用されている茶臼と同じように臼の周縁部分が2cm程度平滑となっている。現代の茶臼は、この周縁部分が平滑になっていることよって、抹茶が微細に粉碎されるとしている。また、「周縁平滑型」の出現は元禄期以降としており、それ以前の茶臼は「切線主溝型」であり、溝を最後まで切っていた。桐山氏は、論文中では茶臼の形式を述べるのとどめ、製作年代の推定を行っていない。

室生寺の茶臼の摺り面に関して記載しているのは、桐山氏の論文のみであり、他のものは茶臼の素材と挽手打込口の蓮座の模様から製作年代が古いものと推定している。山口県漢陽寺の茶臼は、室生寺の茶臼と同じように、蓮座紋を有している唐臼であるが、寺伝によると十五世紀前半に用堂禪師が明代中国から持ち帰ったとされ、室生寺のものと年代が異なる。

ちなみに我々の実験では、茶臼の周縁部分は抹茶の粒度を微細にする効果が認められなかった。すなわち「周縁平滑型」および「切線主溝型」両方の茶臼を用いて、同じ碾茶を粉碎した場合、粒度に違いが見られなかった。

茶臼の年代推定は、素材が石であるために、

cmの円形の受皿を持った特有の形をしている。挽手打込口は、蓮華紋をしており古い茶臼の形態をしている。茶臼の素材は輝緑岩であり、これは茶臼の素材として長く用いられてきた。当初は中国産が持ち帰られていたが、国産の茶臼は高級なものは宇治産の輝緑岩が知られており、安価なものは砂岩などで作られていた。

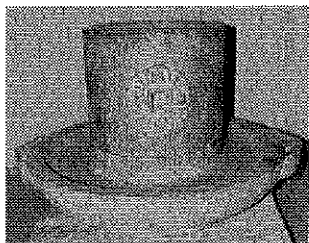
室生寺の茶臼が紹介されているものをいくつか上げると、「図録茶道史」(林屋辰三郎著、村井康彦図版解説、一九八〇年、淡交社刊)では、巻頭に「日本最古の茶臼」として取り上げられている。大西市造氏は、「石臼再発見(3)」(粉体と工業、一九七四年九月)において、大阪教育大学近藤先生の話として鎌倉時代末期(一二〇〇年後期)の作として紹介している。三輪茂雄氏は、「ものと人間の文化史二五 臼(第六章 茶臼)」(法政大学出版、一九七八年)で、石造美術研究家の川勝政太郎氏の紹介として、特徴を記載し、中国伝来のものである可能性が高いとしている。中国伝来のものとしたのは、挽手打込口の蓮座の模様と石の材質からである。三輪氏に紹介した川勝氏は「茶道月報」(一九五三年三月)に「室生寺の石茶臼」として、

古いものや破損したものでも残っており、難しい。年代や名前などが記載されているものは、その年代を推定できるが、それが無いものは、表面の模様や、製作時の技術面から推定することになる。また、遺跡などでは、他の発掘品などから、年代を推定できる場合がある。大西・三輪両氏は、寺院などに保存された茶臼を中心に調査したために、年代が特定できた数少ない茶臼の特徴などから他の茶臼の年代を推測したが、桐山氏は主に発掘品を扱ったために年代の推定には慎重であったと考える。

ここで、室生寺の茶臼は、日本最古と紹介されるのは鎌倉時代末期とされているものであるが、桐山氏が「周縁平滑型」としている点と、三輪氏が「周縁平滑型」茶臼は元禄期以降になってから出現した点で食い違っている。「ものと人間の文化史二五 臼」には、種々の茶臼の写真が掲載されており、「切線主溝型」茶臼の中には周縁部分が摩耗して「周縁平滑型」茶臼のように見えるものがあり、桐山氏は室生寺の茶臼に関して、このように摩耗したものを「周縁平滑型」茶臼と記載したと考えた。

そこで、二〇〇九年七月に室生寺を訪問さ

せてもらい、茶臼を拝見した。その結果、室生寺の茶臼は、唐臼と言われる中国製の輝緑岩でできており、摺り面に關しては桐山氏の論文にあるように「周縁平滑型」茶臼であり、ほとんど未使用と思われるほど摩耗していなかった。(写真参照)



室生寺茶臼全体



上臼

下臼

では、三輪氏の調査が間違っていたのであるのか。三輪氏は、数多くの粉挽き臼や茶臼を調査研究した結果、「周縁平滑型」茶臼の出現を元禄期以降としており、この点では間違いないであろう。

さらに、室生寺の茶臼を詳しく調べると、摺り面の「ふくみ」がまったく確認されなかった。「ふくみ」が無いと茶の粉砕が上手くできない。室生寺の茶臼がほとんど使用された形跡が無いことや、「ふくみ」の無いことおよび外側の装飾を考慮すると、この茶臼は実

用というより、装飾用として製作され、室生寺に奉納された可能性が考えられる。

以上のことから室生寺の茶臼は、中国からもたらされた輝緑岩あるいは茶臼を元禄期以降に、古い茶臼の外観を模して製作あるいは再生したものであり、この時、溝の切り方は「周縁平滑型」となったと考えられる。

川勝氏によって、およそ七百年以上前の古いものとして紹介された室生寺の茶臼であるが、三百年ほど前の江戸時代中期以降の作と考えた方が納得できると思われる。

投稿 二

「天平茶会」について

廣田吉崇

平城遷都一三〇〇年祭記念事業の一環として、本年十月九日から十一月七日までの間、平城宮跡会場内の東院庭園広場において「天平茶会」が開催された。これは、聖武天皇が法要のあとに僧侶に茶をふるまわれたという記録があることから、天平時代の茶を再現して、来場者に一碗の茶をふるまうというイベントである。

当時の日本の茶に関する資料がないことか

ら、「天平茶会」は、ほぼ同時代である陸羽の『茶経』の記述にもとづく茶の復元をめざしたものである。これはすなわち、『茶経』に記された陸羽の茶を、実際にイメージできる意義深い機会でもあった。

このプロジェクトに協力した奈良の煎茶美風流の家元中谷美風氏は、『茶経』を読み解き、試行錯誤をくり返した経験から、『茶経』の記述は正確であり、そして、陸羽の茶は、おそらく当時一般的なものではなく、独自の洗練された喫茶法であろうと説明をされていた。さらに検討を要する面もあるが、この実現の過程で得られた知識はきわめて貴重なものであることはいうまでもない。詳細な内容が公表されることを期待したい。

また、抹茶史を調べている立場から興味深く思えたことは、固形茶を木製の薬研「礪」で、粉末状にまで細かく砕くことができることである。金属製の薬研を用いていた初期の抹茶法を考えると、団茶法から抹茶法への距離はあんがい近いのではないかと感じた。

なお、煎茶美風流のホームページには、「餅茶」をつくる過程などの研究成果が紹介されている。煎茶美風流のホームページ <http://bitfuryuu.com/index.html>

について説明がなされた。これについても、とくに意見なく全会一致で承認された。

最後に、会誌『茶の湯文化学』における原稿執筆規程の一部改正案、および原稿審査規程の一部改正案が影山理事から提案され、原稿種別区分とその体裁、編集委員会と査読者の役割等についての改正点が説明され、全会一致で承認された。



平成二十二年総会は、六月十九日(土)、大会研究発表会々場と同じ名古屋文化短期大学で午後一時から行なわれ、総会を進めるにあたり、議長として中村修也理事が満場一致で選出された。

第一の議題は、平成二十一年度の事業報告および決算報告で、神谷副会長からその詳細説明がなされ、平成二十年度に比べ収支の状況にやや改善が見られたことなどが報告された。監査報告(代読)も引き続き行なわれて、全会一致で承認された。次に平成二十二年年度の事業案および予算案が、同じく神谷副会長から提案され、総会・大会、三回の研究会、各地区の例会、会報・会誌の発行、収支案等

「茶の湯は日本国王の文化として始まった」

石田雅彦氏

「『天王寺屋会記』(津田宗達茶会記)にみる日本語表現」

稲垣信子氏

「いわゆる『茶笈飾(荘)』の成立と展開」

廣田吉崇氏

(午後の部) 「利休時代以前の抹茶の再現と評価」

沢村信一氏

「清末の陶芸家・金士恒について — 通説に對する疑問を中心に —」

内田誠一氏

(これらの発表概要については、追って学会誌『茶の湯文化学』に掲載される予定である。)

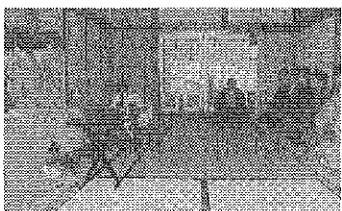
同日は研究発表に続いて、「天目研究の現在」というテーマでシンポジウムが行なわれた(司会は高橋忠彦副会長)。まず以下の各氏の基調講演があった。

佐藤豊三氏の「茶の湯美術における天目」

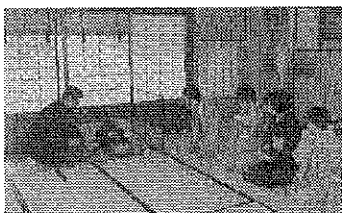
では、室町時代の史料に見られる「建蓋」や「天目」の用例を種々紹介された。森達也氏の「建蓋と灰被り天目—産地と流通」では、十一世紀から十三世紀に建窯で生産された建蓋と、十四世紀半ば以降に茶洋窯で生産された灰被天目の、日本・沖縄での出土状況につ

いて述べられた。また水上和則氏の「臨安天目寺と大目窠窯址出土品」では、近年の中国における発掘調査として、臨安天目寺と天目窯付近での発掘の成果が紹介された。岩田澄子氏の「『仏日庵公物日録』が示唆する天日の由来について」では、中国の元代の禅僧、中峰明本との関連において天目の由来を述べられた。これらの講演のあと討論に入り、建齋と天目との違い、天目についての更に詳しい実態、油滴や曜変に関する指摘など、さまざまに新しい知見が明らかにされた。

翌六月二十日(日)は、午前十時から午後三時まで、名古屋市昭和区の八事山興正寺で茶会が行なわれ、同寺の耕雲亭が煎茶席、竹翠亭が薄茶席に定められ、それぞれ売茶流家元高取友仙窟、裏千家流神谷栞軒の両氏が席主を務めて下さった。両席には、由緒の深



煎茶席にて



薄茶席にて

いう言葉を取り出し、珠光における「和漢」表現の源流を探ることを目的としている。

珠光における「和漢」表現を考察するにあたり、古代から中世で用いられた様々な和漢表現を取り上げた。まず、文芸における和漢表現では、『和漢朗詠集』・『和漢混濁文』・『和漢聯句』を取り上げ、和漢の調和や繋がりから和と漢における横の関係を示した。次に美術工芸品における和漢表現として『君台観左右帳記』・『正徹物語』で使用される和漢の言葉を取り上げ、唐物と和物の記述から和と漢における縦の関係を指摘した。これらの和漢表現を踏まえ、珠光の「和漢」表現は文芸や美術工芸品における和と漢の関係を内包したものとし、横へも縦へも広がる「和漢」表現であることを示した。

珠光の「和漢」表現は、同時代に流行した和漢聯句に影響を受けている。和漢聯句の発達は、和と漢による異種配合の面白さを生み出し、文芸以外にも絵画と工芸品、また、絵画と文芸の組み合わせの中にも求められていった。このような試みは、室町時代の諸芸能や文化に浸透し、茶の湯の中にも取り入れられたと思われる。珠光が茶の湯で「和漢」という言葉を用いるとき、そこには縦横に広がる

い道具、両席での茶会のあと、当寺の大書院で点心も振舞われてお開きとなった。

例 会

東海例会

(平成二十二年九月二十四日)

「京都名所図会案内」

廣瀬千紗子

江戸時代初期から旅する人が増え、ほぼ同じころに出版事業も普及すると、京都でも『京童』(一六五八)を始めとして、『京雀』(一六六五)、『京羽二重』(一六八五)など、多くの地誌・名所記が出版されたが、安永九年(一七八〇)年、吉野屋為八が『都名所図会』六巻六冊を出版するや、書物が大型化し、地誌の形式は一変した。著者は京都の俳諧師、秋里籬鳥。絵師は大坂の竹原春朝奇。巻一・二は「平安城首・尾」、以下巻三・四・五は「その四方を帝都鎮護の四神」(凡例)にちなみ、「青龍」(左・東)、「白虎」(右・西)、「朱雀」(前・南)、「玄武」(後・北)と名付けた。全巻で五八八丁、二四六図を擁し、画面は見開きいっぱいの迫力である。寺社境内など「境地広大なる所は(人物)細画」に、

空間的世界があった。それは単なる和の世界と漢の世界の一部を取り入れたものではなく、珠光自身の中に存在する和漢の世界であった。(平成二十二年九月十一日)
「寛永三年の二条城行幸時における遠州茶会の目的
—前田家・浅野家家中を中心として—」
深谷信子

報告は、小堀宗慶編『小堀遠州茶会記集成』(主婦の友社)をもとに研究した深谷信子『小堀遠州の茶会』(柏書房)で述べた新たな遠州像を前提とした。すなわち①小堀遠州(一五七九年〜一六四七)は、慶長九年以来、備中国奉行・上方郡代・伏見奉行・上方八人衆等を四十年間にわたって歴任した畿内枢要な幕僚であった。②上方郡代の職務内容は、將軍上洛の準備・公儀の城郭や御所の作事・天皇行幸の饗応等、畿内という特殊な地域における特別な役割をもっていた。③寛永三年の後水尾天皇の二条城行幸は、東福門院和子が入内したことから、当時の最高実力者である大御所・秀忠白らが計画したものであった。遠州はその指揮のもと、郡代として同役五味豊直とともに、行幸に関わる全責任を果たし

花見や螢狩、大文字の送り火など、季節毎の「遊楽の地」は「人物の大画」に描き分け、名所旧跡に現代風俗を織り交ぜた。その後、『和泉名所図会』(一七九六)、『摂津名所図会』(一七九六)ほか、東海道、伊勢参宮、木曾路、金毘羅など各地の名所図会がブームとなり、『江戸名所図会』(一八三六)も現れた。名古屋では尾張藩士高力猿猴庵、のち小田切春江転写『尾張名陽図会』(一八三三〜一八三〇)などは手書きで、祭礼や見世物の彩色も味わい深く、やがて天保十五年(一八四四)、『尾張名所図会』前編七巻(後編六巻は明治十三年刊)に結実した。

近畿例会

(平成二十二年七月十日)

「珠光における『和漢』表現の一考察」

萩原英子

『珠光古市播磨法師宛一紙』は、珠光が弟子の古市澄胤に茶の湯の極意を書いて送ったとされるものである。この中に、「此道の一大事ハ、和漢之さかいをまきらかす事、肝要ク、ようしんあるへき事也」という一文がある。本発表は、この一文の中から「和漢」としていた。④遠州は、その大役を果たす合間に、全国から三十万人もの武将達が上洛する機会を捉えて、慶長六年以来二十五年ぶりに自会を催すことを計画し、合計二十四回、両御所の側近、大名、幕僚など延べ九十三人の客を招いたことである。

今回は、そのなかから加賀百万石前田家と広島藩浅野家家中が混在して招かれた五回の茶会を取り上げ、遠州がこのような客組を行った目的を探ってみた。

前田家・浅野家は、豊臣秀吉と強い縁戚関係があり、ともに生死を懸けて天下統一を成し遂げ、関ヶ原戦、大坂陣、それ以後も両家は徳川家と対峙してきた。大御所秀忠は政権を磐石にして、將軍家光に継承させるためには、外様大名の両家を政権のなかに組み込むことが急務と考えた。このような状況のなか、一連の遠州茶会は、幕府から命じられた政治的な内容をもっていたことが推測される。両家を中心とした系図から、茶会が両家の婚姻を仲立ちしたとの推測をした。

しかし、將軍茶道師範であった師・織部の横死以後十年あまり経った今、遠州は、その茶だけは白らが工夫を重ねた結晶を客達に披露しようとした。そのため、白らの美意識で

選び、織部とは違う、誰もが使用したくなるような道具組を調べて客を迎えた。客の半分以上は織部の茶を知っていた。前田・浅野家中は、遠州の室礼をどう受け止めたのか？そして、大御所秀忠の評価は？遠州の最も気に掛かるものだった。

例会のご案内

東京例会（会場 根津美術館 午後二時～）
一月二十九日（土）

「近世前期武家の茶の湯と江戸・京都

― 旗本茶人を中心に ―（仮）

八尾嘉男氏

「茶道具の銘についての一考察（仮題）」

砂澤祐子氏

近畿例会（会場 堺市立泉北すえむら資料館

午後二時～）

大阪府堺市南区若松台二丁目四大

蓮公園内 ☎072-291-0230

（交通）阪和線「三国ヶ丘駅」から

泉北高速鉄道「泉ヶ丘駅」下車

徒歩八分

二月五日（土）

「『大王寺屋会記』（津田宗及茶会記）に
みる日本語表現」 稲垣信子氏

「堺環濠都市遺跡出土の茶道具について」

森村健一氏

なお森村健一館長の解説で展示品の
出土した茶道具の見学があります。

北陸例会（会場 県指定文化財・旧古河屋別
邸・通称「千石荘」午後二時～）

三月二十六日（土）

「北前船主 古河家の建物について」

吉江勝郎氏

旧古河屋別邸と船頭の屋敷の見学を含む

（定員三十五名）

所在地 福井県小浜市塩屋

問合せ 旅館福喜 0770-52-3077

高知例会（会場 高知県立文学館慶雲庵茶室

午前十時～十二時）

二月十三日（日）

「森田久右衛門日記」

小松 聡氏

一般の方々が茶の湯に親しんでもらう

ための茶席を設ける。

会場 高知県立文学館慶雲庵茶室

時間 十時～十六時まで

開催予定日 毎週日曜日を主体とする
（会費三百円）

お知らせ

*来年度の大会は六月十一日（土）に明治大
学の駿河台校舎（東京都）で開催する予定
です。詳細はホームページにてご確認下さ
い。発表を希望される方は、八〇〇字程度
の要旨を添えてお申し込みください。応募
者多数の場合は、審査の上決定いたします。
*年会費を未納の方は、同封しました払い込
み用紙にて至急お払い込みくださいますよ
うよろしくお願いいたします。